

近代読者の成立

2001年2月16日 第1刷発行

著者 まえだ あい
前田 愛

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
現代文庫編集部 03-5210-4136
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・精興社 製本・中永製本

© 前田峰子 2001

ISBN 4-00-602032-5

Printed in Japan

本書は一九七三年有精堂出版より刊行された。底本には、同時代ライブラリー版（一九九三年、岩波書店）を用いた。なお同時代ライブラリー版編集時に『前田愛著作集』第二巻（筑摩書房、一九八九年刊）を参照した。

目次

天保改革における作者と書肆	1
明治初期戯作出版の動向——近世出版機構の解体	41
鷗外の中国小説趣味	93
明治立身出世主義の系譜——『西国立志編』から『帰省』まで	114
明治初年の読者像	145
音読から黙読へ——近代読者の成立	166
*	
大正後期通俗小説の展開——婦人雑誌の読者層	211

昭和初頭の読者意識——芸術大衆化論の周辺	285
読者論小史——国民文学論まで	313
あとがき	377
初出一覧	383
解説	385
飛鳥井雅道	

創造は読者のなかでしか完成しない。芸術家は自分のはじめた仕事を完成する配慮を他人に任せなければならぬし、読者の意識を通じてしか、自分を作品に本質的なものと考えることができない。従って、あらゆる文学作品は呼びかけ (appel) である。書くとは、言語を手段として私が企てた発見を客観的な存在にしてくれるように、読者によびかけることである。

サルトル『文学とは何か』加藤周一訳

『西国立志編』に匹敵するベストセラーであった(『東京新誌』昭二年三月)。

(2) 書生を扱った明治初年の文学作品の主要なものに、仮名垣魯文の『安愚楽鍋・第一章書生の酔話』(『西洋道中膝栗毛』六編所収、明四年刊)、服部撫松『東京新繁昌記』初編明七年刊、高島藍泉『開化百物語』(明八年刊)、和田竹秋『鴛鴦春話』(明十二年刊)、二世為永春水『浅尾岩切真実競』(明十六年)、三木愛花『情天比翼縁』(明十七年刊)などがある。

(3) 福島中学時代に高山樗牛は「穎才新誌」を愛読し、『世路日記』を模倣して『春日芳草之夢』という習作を書いているが、これは「穎才新誌」の読者層と『世路日記』の読者層との関連を示す一つの事例であろう。

(4) 『世路日記』には「満堂寂寂、更二人語ナク、只ダ時器ノ一隅ニ分秒ヲ刻スル音ノミ凄然タリ」というように、はじめ三〇ページ程で六回も時計の描写がくりかえされているが、これは西洋時計の輸入によって、近代的な時間感覚が、明治人の生活に浸透したことの象徴であって、「時は金なり」の観念は、時計の使用とともに定着し、一方では生活時間の合理化をもたらしつつ、他方では、不安で落ちつかない気分を毎日の生活の中に行きわたらせることになる。

明治初年の読者像

仮名垣魯文の『安愚楽鍋』に登場する民衆たちは「ひらけ」ということばを好んで口にする。たとえば「当時の形勢はおひくひらけてきやした」(半可の江湖談)という工合にある。この「ひらける」には「文明開化」の新しい状況を受けとめた民衆の側の素朴な実感がこもっている。それはたんに「啓蒙」の「啓く」を意味していたばかりではなく、維新とともに新時代が開かれる予感、閉ざされた生活圏の拡大、未知の西洋に向けられた旺盛な好奇心など、じつにさまざまな期待がかけられていたことばなのである。

コミュニケーションにおける「文明開化」は、閉鎖的なコミュニケーションから開放的なコミュニケーションへの転回を意味している。

明治新政府はタテの面では身分制度の枠組を撤去し、ヨコの面では藩体制の障壁を解体させる過程を通じて、中央集権的な国家体制の整備を急いだ。その不可欠な要件のひとつがタテヨコに分断された閉鎖的なコミュニケーション市場を全国的な規模で組織化し、そ

の流通機能をたかめることにあったことはいうまでもない。飛脚にかわる電信、早馬にかわる蒸気車の登場は、促進されたコミュニケーション速度の象徴として人目を奪ったが、コミュニケーション拡大のもっとも困難な課題は受け手の側の態勢にあった。大衆の読み書き能力である。「いかにシムボルが中央の機関で製造されても、集団メンバーのあいだにそのシムボルの解読能力がないかぎり、共通のものとしての意味の流通は存在しえない」とりわけ、コミュニケーション通路が『文字』を中心とする時代には大衆の読み書き能力の有無が決定的な基礎条件となる」(加藤秀俊氏「明治二〇年代ナショナリズムとコミュニケーション」坂田吉雄氏編『明治前半期のナショナリズム』所収)。明治初年における日本人の識字率は男子四〇ないし五〇%、女子一五%と推定されている(R・P・ドーア「徳川教育の遺産」『日本における近代化の問題』所収)が、平がなはともかく漢語すぐめで記された新政府の布達・法令を解読しうる能力を基準に測定するならば、この数字はもっと低くなるだろう。事実、明治政府は王政復古のイデオロギーと文明開化の効能とを民衆に浸透させるためには、まことに効率のわるい方法を採用しなければならなかった。全国の神官・僧侶を教導職に任命し、三条の教憲の趣意を民衆に説き聞かせた「説教」がそれである。この「説教」は文字コミュニケーション(神官・僧侶等の有識者のレヴェル)に口話コミュニケーション(民衆レヴェル)が継ぎ足されたものであって、この過渡期におけるコミュニケーション状況の

不均衡を象徴する典型的な産物にはかならない。民衆の意向を無視したこの官製のコミュニケーションは結局惨めな失敗に終わった。開化期の民衆はお上から「開かれる」ことに甘んじていたわけではなく、かれら自身で「ひらける」ことを望んでいた。増大する「文明開化」の情報量を消化・吸収しうる学習能力の獲得は、切実な生活的要求でさえあった。このころの新聞には民衆の学習意欲のたかまりを物語る記事がしばしば現われているが、任意にその一例をぬき出してみよう。

埼玉県下秩父の白久村に居る山中右助の孫暉之助は小学校へもよく通ひ休暇の日には町へ出て近世史略を買つて帰ると親父が見てこんな分らない書を出して買つて来るとはとんでもない馬鹿野郎だとして大きに叱られ暉之助がいふには祖父さんが疝氣で寝ておいでだから退屈だと思つて買つて来ましたといふので祖父さんに見せると祖父は大きに悦び其本を読んで聞かせたので親父も感心し始めて本といふものは善物だと心付きましたが当時は親が子供のために閉口する事がまゝ有ります。(『読売』明十年四月五日)

小学校に通学する子供から親が逆に読書の意義を教えられる話である。口話コミュニケーションを基調とするムラの生活にもようやく文字コミュニケーションが浸透しはじめたのである。このような話が美談に仕立て上げられる背景には、福沢諭吉の『学問のすゝ

め」、ないしは「邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカシメン事」を要請した明治五年の太政官布告の思想が考えられるだろう。明治の初年ほど読み書き能力の習得が美德として肯定された時代も稀である。

ものを読む習慣を民衆に普及させた新聞の役割は、小学校のそれに劣らない。政論を中心とするいわゆる大新聞の創刊は明治五年から七年にかけてのことである（『東京日日新聞』が明治五年二月、「郵便報知新聞」明治五年六月の創刊。「公文通誌」から「朝野新聞」への改題が明治七年九月）。しかし、フリガナの無い漢文調の文章で書かれた大新聞の読者層は官吏・学者・学生などの知識人で、一般民衆は疎外されていた。大新聞と漢語を理解できない民衆とを結びつけるために工夫されたものが地方の有識者によって自主的につくられた新聞解話会である。

山城国紀伊郡横大路村の梅木治三郎は早く開化にしたいとて近所のものを集めて深切に新聞の講釈をして聞かせるのはいかにも感心でござります。（『説亮』明十年四月二十日）

この解話会は教導職の説教と同じく文字コミュニケーションに口話コミュニケーションを継ぎ足した形をとっているが、こちらは官製ではなく、民間に発生した自主的グループなのである。そのことは「新聞演説所」とか「新聞会同盟」とかいう多種多様な呼称によって示されている。たとえば「新聞演説所」という呼称は、福沢諭吉らが創めた演説流行の機運と無関係ではないかもしれない。

この新聞解話会のスタイル、ないしは教導職の説教のスタイルを、文体の基調として採用したのが、フリガナつきのいわゆる小新聞である。小新聞の登場は大新聞にややおくれ、明治七年から十年にかけてのことであった（『読売新聞』は明治七年十一月創刊。翌八年には後に「東京絵入新聞」と改題した「平仮名絵入新聞」、「仮名読新聞」等がそれぞれ創刊された）。これら小新聞の記者は仮名垣魯文、高島藍泉、柴崎延房（『世春水』）などの戯作者か、前田健次郎のような国学者であって、かれらの平易な口語体の文章は、大新聞の漢文体の文章に馴染めなかった一般大衆にも容易に親しめるものであった。

大坂本町四丁目の森田小八の娘おとらは年が十六にて……遊芸は是が出来ないといふ事はなく……芝居や寄席へも精出して通つて居り直に向ひの村上真斎といふ人は新聞が大好で近所の娘子供へも常々読んで聞かせお虎も参つては聞きだん／＼新聞へ心が移つて三味線もやめ踊りも止め三種のふりがな新聞を取寄せて見る様になり始のうちは親達も新聞などを読むと高慢になつて悪いと止めてもお虎は聞入れず……親父も追々ひき込まれて此節は大坂日報攪眠新誌などを取寄せて見るから世間の様子も知れ全く村上さんのお蔭だといつて悦んで居る。（『説亮』明十年四月二十三日）

十六の小娘が遊芸をやめて新聞に熱中するところに実学尊重の時代相がよく現われている。小新聞は大新聞が相手にしなかった女性読者や一般大衆を吸収して、大新聞を上回る発行部数を獲得(たとえば読売新聞は明治十年中に二万五千部の発行部数に達し全国一となった)したわけだが、この小新聞の進出は民衆に「読みもの」を提供する回路を独占してきた貸本屋の退場をうながすことになる。

近ごろ新聞雑誌が流行にて絵草紙屋にも余ほど響くとかいふが或る貸本屋の話に凡そ悪いものは新聞屋で新聞紙が出来てからは花主が半分には減じてしまつたと、ブツ々苦情をいつて居るのはお気の毒なこと。(『読売』明十一年四月二十八日)

明治十年の暮に呼売りの新聞売り子による販売方式が禁止されたために、小新聞は瓦版的な性格をあらためて、定期刊行物としての性格を鮮明にしなければならなくなった。戯作者出身の小新聞の記者が、この読み売り禁止と相前後して、いわゆる「つづきもの」の連載に力を入れるようになったのは、決して偶然ではない。毎朝配達される小新聞の「つづきもの」の魅力から、民衆は毎日定量の活字を消化する習慣を体得することになるのである。三日から十日の間隔で戯作小説の続編をとりかえにまわってくる貸本屋の継本制度などは、まったく間のびのした旧弊の遺物になってしまった。しかも小新聞の価格はほぼ貸本の見料と見合う廉さなのであった。

しかし、小新聞を読まない書生は貸本屋のよいお得意として残った。学校の寄宿舎・寮・下宿屋などを、和本の戯作小説を包んだ大風呂敷を背負って巡回する貸本屋の姿は、明治の小説や回想録にいきいきと描かれている。鷗外が『キタ・セクスアリス』や『細木香以』に貸本の読本や人情本を耽読した体験を記しているのはよく知られているし、謹厳な二葉亭にも外国語学校に出入りする貸本屋から、八犬伝や梅曆を借り出して愛読した一時期があった。明治十年に制定された駒場農学校の「生徒寄宿寮規則」では、寮内の禁止事項の第五に「小説稗史等ヲ読むことを挙げてゐる(安藤国秀氏『農学事始め——駒場雑話』)が、このような規則が制定されたこと自体、貸本屋の出入がひんばんだったことを裏書きしているといっている。

この古風な貸本屋が退場したのは、長谷川如是閑の実兄、山本笑月の証言によれば、明治十五、六年ごろのことであつたらしい。「新版小説が漸く流行、洋紙本の荷も重く、同時に草双紙や読本のお好みも減つて背取りの貸本屋はポツポツ引退、代つて居付きの貸本屋が増え」(『明治世相百話』)たのである。「居付きの貸本屋」というのは固定した店舗を構え、保証金をとって貸し出す貸本屋のことである。この新しい型の貸本屋としてよく知られているのは、『当世書生氣質』が評判をよんでいた明治十八年に京橋に開業、間もななく神田錦町に進出した「いろは屋」である。南柯亭夢筆の「書生／風俗 いろは屋貸本

店」(風俗画報「二二八号・二四三号)は、いろは屋の蔵書について「十の九分は學術書にて、稗史小説は、僅々十の一にして、其れ將た野卑賤劣なる講談速記の類は、殆んどあるなく、只だ少しく逍遙筆村、露伴紅葉等の新作小説あるのみ」と伝えているが、神田・本郷の學生街を控えていたいろは屋の顧客の九分以上は書生で、一ヶ月の貸出点数は八九千に及ぶ盛況だったという。「小川町を少し行つて右に折れて又左にちよつと入つた所にいろは屋といふ貸本屋があつた。今では本の代価を払はないでは貸してくれる貸本屋もないやうだが、その頃はその金がなくつてもドシドシ借りて来られた。『我楽多文庫』『新著百種』『国民之友』その他新刊の雑誌を読むことの出来たのは、その書店のお蔭であつた(『東京の三十年』と、いろは屋への懐かしい思い出を記しているのは田山花袋である。花袋にかぎらず、この私設図書館の恩恵をこうむつた明治の書生はおびただしい数に上つたことであらう。

「いろは屋」と並称される明治式の新貸本店は、京橋三十間堀にあつた「共益貸本社」である。この店は貸本と同時に閲覧室の設備があり、菊判二段組五十二ページの和漢書目録、同型三十四ページの洋書目録を発行していたという番掛伊左吉氏「コレクシヨンの中の貸本屋」(日本古書通信「二四九号)。国木田独歩の「明治二十四年日記」の一月二十六日の項に、この共益貸本社から新作十二番の「かつら姫」「鎌倉武士」を借り出した記載がある。

「いろは屋」・「共益貸本社」などの私設図書館が繁昌したのは、ほとんど唯一の公共図書館ともいふべき東京図書館が施設・蔵書ともに貧弱をきわめていたことがその一因であらう。東京図書館が明治十八年に湯島の聖堂から上野の教育博物館(現在の芸大構内)に移転したときの蔵書数は、和漢書一万二千部、洋書五千二百部にすぎなかつたといわれる(『上野図書館八十年略史』)。閲覧室の定員は公称二百人であつたが、じっさいには百五十人を容れる余地しかなかつた。明治二十四年の六月ごろから文学修業のために東京図書館に通いはじめた樋口一葉も、八月八日の日記に「図書館は例へいと狭き所へをし入らるゝなれば」と記している。またこれにつづけて「いつ来りてみるにも、男子は、いと、多かれど、女子の閲覧する人、大方、一人もあらざるこそあやしけれ。……多くの男子の中に交りて、書名をかき、号をしらべなどしても行にこれは、違ひぬ、今一度書直しこなどいはるれば、おもて暑く成て、身もふるへつべし。まして、面みみられさゝやかれなどせば、心も消る様に成て、しと、汗にをしひたされて、文取しらぶる心もなく成ぬべし」とも記している。このころ東京図書館では一人一回につき一錢五厘の閲覧料(当時そばのもりかけが二錢)を徴収した。あるいは一葉は十回分十二錢の割引回数券を買求めていたかもしれない。

ここでもういちど話を明治十年代に引もどして、自由民権時代の読書風景を一べつして

おこう。

文明開化時代に新聞解説の自主的グループが全国に発生したことはすでに述べたが、十年代には民権運動に関心を寄せる青年たちの学習サークルがおびただしく現われた。このころ青少年の投書雑誌として人気をあつめていた「穎才新誌」は、これら学習サークルの消息をことこまかに報道しているが、明治十四年から十五年にかけてそのめばしいものを拾ってみると、つぎのとおりである。

高知新市町	夜学連	十四年八月六日
千葉県鶴舞村	青年学術演説会	十四年九月十七日
千葉県敷谷村	靖共社	十四年十月一日
神田美土代町	青年自由演説会	十四年十月十五日
上総大多喜村	討論会	十四年十月十五日
岩手県波民村	蛍雪社	十四年十月二十二日
千葉望陀郡	興村会	十四年十一月五日
山口県山口	忠告社	十四年十二月二十四日
宮城米谷駅	交誼社	十五年一月十四日
高崎	金曜会	十五年三月十一日

この学習サークルの実態はどのようなものであったか。高知新市町の夜学連を例にとつてうかがってみよう。

高知県下高知新市町の夜学連は最初結合せしも固より有志家の鼓舞誘導に出でたるにあらず純然たる平民の自ら奮ふて組成せしものにして其の目的たる只に書を読み文を学ぶのみならずして久しく平民社会を支配せる卑屈矇昧の夢を警醒し天与の権利を伸張して以て早く国会の開設を見るの美域に進まんとするにありて此頃は会議を起し先づ議長書記夫れんくの事務係を設けかつ議事則学則等を議定し志和某翁を教員に聘せ

鹿児島県川辺	青年同盟研修社	十五年三月十一日
横須賀	開智社	十五年三月十一日
和歌山中学	修辞会	十五年四月二十九日
長崎	青年蠅屈社	十五年五月七日
栃木県茂木町	賢梯社	十五年五月七日
広島県丸河南村	中立龍山会	十五年七月十五日
広島県福山	青年談話会	十五年八月十九日
水戸	強励会	十五年十一月十一日
仙台	青年懇談会	十五年十一月十一日

しよしなければ会員は日々増加し中にも容易き著書訳書は勿論左氏伝八大家読本日本外史或は社会平権論評を能く講読する者ありてすでに理髪店の中岡寅太郎の如きは不日高知演説組合へ加入し人間同等の真理を演説せんと頗る奮発し居る由。(『穎才新誌』二一九号)

高知の新市町は隣接する鉄砲町や紺屋町と同様に武士ではなく町人が住んだ一画である。士族の青年を中心に盛り上った自由民権の機運は、やがて平民の青年の政治意識をめざめさせることになったのであろう。読書会のテキストとしてあげられている『社会平権論』はハーバート・スペンサーの原著、松島剛の翻訳で明治十四年五月にその第一巻が出版された。板垣退助によって天賦人權の教科書といわれた書物である。高知出身の田岡嶺雲は『教奇伝』の中でこの『社会平権論』が士族の青年の間で愛読されたことを記しているが、理髪店の職人までが天賦人權論を自主的に学習しようという意欲を示していることは、民権運動発祥地の出来事とはいえ、やはり注意されている。

政治意識の昂揚を目標にかかげた青年の学習グループは、読書会と併行して政治演説の練習を行なったばあいが多かった。そのことはグループの名称に「○○演説会」というような形式がすくなくないことに示されている。

一方青年層の政治参加を極度に警戒した明治政府は明治十五年七月につきのような布達を各府県におくった。

学校生徒ニシテ学術演説ヲ為スハ教育上不都合ノ儀ニ付相成ラズ。最モ公衆ヲ聚メズシテ之ヲ為スハ不都合ト認メザル分ニ限り、特ニ差許シ候儀苦シカラズ。此旨相達候事。

青年の学習運動はこの布達が発せられた明治十五年を境に下降線を辿りはじめる。北村透谷の盟友、石坂公歴が透谷をもふくめて三多摩の自由党系青年を組織した読書会は、明治十七年秋から十八年の初頭にかけて開かれていた(色川大吉氏「自由民権運動の地下水を汲むもの」『明治精神史』)所収が、その時期はまさにこの全国的な学習運動の退潮期にあたっていたわけである。

学習サークルがつぎつぎに解体してゆく十年代の後半に、もういちど青年たちの政治的情熱をたかめる役割を果たしたのは、『経国美談』や『佳人之奇遇』などの政治小説である。とくに要所所に漢詩をちりばめ、華麗な四六調の美文を駆使した『佳人之奇遇』は、ひろく書生たちの間で朗誦された。

佳人之奇遇の華麗な文章は協志社にも盛に愛読され、中に数多い典麗な漢詩は大抵諳記された。敬二が同級で学課は兎に角詩吟は全校第一と許された薄痘痕の尾形吟次郎君が、就寝時近い霜夜の月に、寮と寮との間の砂利道を『我所思在故山…』

月横大空千里明、風揺金波遠有聲、夜蒼々兮望茫茫、船頭何堪今夜情」と金石相撃つ鏗鏘の声張り上げて朗々と吟ずる時は、寮々の硝子窓毎に射すランブの光も静に予習の黙読に余念のない三百の青年ぶる／＼と身震ひして引き入れられるやうに聞き惚れるのであつた。(徳富蘆花『黒い眼と茶色の目』)

この同志社の寄宿舎に見る風景は、『佳人之奇遇』が、密室における孤独な黙読をたてまえとする近代小説とは異質な何かを具えていたことを示唆している。それは公衆の面前で朗誦された叙事詩の享受方式に近い。近代小説の読書が、密室のなかで作者のエゴの手触りをたしかめて行く孤独な作業であるとするならば、学校・寄宿舎・私塾・結社等の精神共同体の内部で、声高らかに朗誦された『佳人之奇遇』は、メンバーの連帯感を強化し、ナシヨナリズムの情念を励起する強力な磁性を帯びていたのである。

明治維新に引きつづく約四半世紀は、日本人の読書生活が大きな変革を迫られた時期であった。その変革の過程をつらぬく契機は、ほぼつぎの三つに要約されるのではないかと考える。

- 1 均一的な読書から多元的な読書へ(あるいは非個性的な読書から個性的な読書へ)。
- 2 共同体的な読書から個人的な読書へ。

3 音読による享受から黙読による享受へ。

この三つの契機は分かちがたくからみ合っているけれども、その根底には飛躍的に増大する情報量(木版印刷から活版印刷へ!)と、共同体のきずなから解き放たれて自我にめざめて行く近代人とのダイナミックな相互作用がある。それはリースマン流の表現をかりるならば、両親や教師から授けられた規範に従って生きることを善と考えていた伝統志向型の人間にかわって、活字をとおして自己の信念を築き上げ、未知の世界へと孤独な冒険を開始する内的志向型の人間が登場する過程ということになるだろう。

幕末から明治初年にかけて幼少年時代をすごした人たちの回想録を披いてみると、かれらが始めて書物の世界に接したときの驚きとよろこびとが、祖父母・両親・兄妹への追憶とひとつとけ合った印象深いページにめぐり合うことがしばしばある。かれらは明治国家の未来像をはるかに望みながら、絶えず鼓舞され、激励された世代であり、伝統的な世界観を克服する役割を引きうけて勇み立っていた世代であった。それだけに間もなく失われようとする父たちや兄たちの教養圏の残照を幼少年期に垣間見た体験は、その記憶にあざやかに刻印されたのである。かれらの読書体験のおどろくべき等質性は前代の教養圏が保持していた洗練された秩序の名残りをとどめている。一つの時代に別れを告げ、しかもその時代に繋がれていた臍帯を共有するという感覚は、かれらの世代特有のものであつ

た。かれらの読書の記憶は肉親の声の記憶とともににはじまる。漢籍の素読、または草双紙の絵解きである。素読の口授は祖父・父・兄の役割であった。たとえば渋沢栄一（一八四〇年生）のばあい。

五才の春から親しく父の口授の下に、習ひ始めた「三字経」といふのは、其頃況く世に行はれたもので「人之初。性本善。性相近。習相遠」などと韻を踏んで、倫理・道德、天文、歴史、文学を極めて平易に説いた、三十枚程の本であった。「三綱君臣義。父子夫婦從……。蚕吐糸犬守夜……」朗々として誦する父が句読は、今尚ほ耳底に在る心地がする。（渋沢栄一『伝記資料』第一巻）

草双紙の絵解きを聞かせるのは祖母・母・姉の声である。たとえば江見水蔭（一八六九年生）のばあい。

自分の祖母は非常に小説好きであつた。……それで自分の五六才の頃には、能く祖母から草双紙の絵解きをして貰つたので、『八犬伝』なんかは馬琴の原書ではなく『犬廻草子』や『かなよみ八犬伝』の方で、早くから馴染であつた。此他『白縫物語』だの『雲龍九郎』だの『児雷也』だの『妙々車』だの『一休草紙』や『釈迦八相記』や、そんな種類の本の挿絵を見て、時には仮名の拾ひ読みなどして喜んでゐた……。（自

己中心明治文壇史）

この炬燵の媒体、家庭的な文字教育ないしは文学教育が、父・素読型と母・絵解き型という二つの型を共存させていたことは、伝統的な社会が育くんだ独得の穎智でなければならなかつた。一方は漢語の動い響きを反復することによって規範への馴化を訓え、他方は七五調のなだかなリズムに乗せて規範から逸脱した世界の所在を開示する。儒教的な秩序はその反世界としての幻想の領域を黙認することによって平衡が保たれる仕組だが、この近世社会特有の抑圧と解放のメカニズムは家庭教育のあり方をも規制していたのである。子供にとって漢籍の素読にともなう苦痛は、草双紙の放恣な夢想が補償を与えてくれるであらう。（田岡嶺雲は父から『小学』の素読を授けられたとき、「訳も判らず難しい者とは思つたが、漢籍を習ふといふ虚栄の誇りのために、左程厭とは思はなかつた」が、草双紙の拾ひ読みは「又なく楽しみであつた」と語っている——『教奇伝』）。そしてまた漢籍の素読が進めるあまりにも早すぎる社会化の過程は、空想の材料を豊富に供給する草双紙の絵解きによって適度に緩和されるのである。

この幼年期における素読と絵解きの読書体験は、青少年期における漢字塾での四書・五經・左伝・史記・八家文などの学習、貸本屋から借りた読本・人情本・実録ものの耽読に引きつがれて行く。坪内逍遙（一八五九年生）、片山潜（一八五九年生）、森鷗外（一八六二年生）、

徳富蘇峯（一八六三年生）、正岡子規（一八六七年生）、幸田露伴（一八六七年生）、田岡嶺雲（一八七〇年生）等の人々はこの型の読書体験の持主である。

しかし、明治十年代の半ばすぎに少年期に達した人たち、いかえれば正規の小学校教育を受けた第一世代に属する人たちになると、その読書体験はようやく多様化の兆しを見せてはじめる。かれらが少年期に達したときには、漢学塾の役割は正規の学校教育に比べて相対的に低下していたし、すでに触れたように旧式な貸本屋の退場は決定的になっていた。しかも、このころ大量生産の方式により木版印刷を圧倒し去った活版印刷は、木版本とは比較にならない低廉な価格で書籍・雑誌・新聞を市場に奔流させることになったのである。内務省の統計によれば明治十四年には書籍の出版点数が五九七三、新聞雑誌数が二五三であったが、明治二十年には書籍が九五四九、新聞雑誌が四九七となつてゐる。七年間で約二倍弱の増加である。木版本と活版本の価格のひらきを示す実例を二三挙げてみると、明治十二年出版の草双紙『高橋阿伝夜刃譚』は木版八編で一円、明治十八年刊の活版改装本は三十六銭である。明治十六年に以文会社から出版された木版本の『漢書評林』は二十五冊で十円、同じ年に東京印刷会社から出版された活版本は五十冊で四円五十銭、明治十八年に鳳文館から出版された木版本の『史記評林』二十五冊は六円、同年に東京印刷会社から出版された活版本五十冊は三元五十銭の価格である。

木版印刷の時代には三都や好学の家庭はともかく、一般家庭の蔵書は貧しく、その種類も限られていた。家族めいめいの蔵書が区別されていることは稀で、家族共有がふつうだったのである。

私の少年時代には、子供の読みものは少かつたし、ことに倉敷の町には、小学校の教科書の取次店がいい、本屋というものはなかつた。義兄の林家が、明治の初年に「書肆」をやっていたことは前に述べたが、当時は本屋というものは、ひとかどの知識人がやったものとみえ、後に私の郡の郡長をつとめた森田（森田思軒の父）という人も笠岡で「書肆」をやっていた。ところがこういう木版時代の本屋が消滅したあとに、田舎ではまだ活版時代の新しい本屋は生れていなかつた。それで小学校のころ、私は新聞の広告を見て、博物の書物がほしくなり、わざわざ東京の富山房（？）から取りよせたこともあった。なにか特別の家でもないかぎり、どこの家庭にも蔵書というほどのものはなく、私のところでも『論語』や『孟子』『唐詩選』とか『日本外史』といったぐいのがいくらかあったにすぎなかつた。悪意な家に『八犬伝』があつたので、一と冬『八犬伝』を借りて来て、毎晩、父がおもしろく読んでくれるのを、母は針仕事を、姉は編物をしながら、家内じゅうで聞いたことがあつた。（山川均自伝）

ここには明治二十年代における地方小都市の読書環境がいきいきと描かれている。山川

家は旧幕時代に蔵元を業としていた旧家でありながら、家庭の蔵書は『唐詩選』『日本外史』ていどのものしかなかったのである。しかし、山川少年が富山房から博物の本を取りよせていることは、家族ぐるみの蔵書から個人の蔵書が独立する芽生えとして注意していいであろう。山川均が「同志社にはいって、私ははじめて読書ということを学んだ」と述懐しているように、地方出身の青年たちは遊学のため都会に出たときに、はじめて書物への渴望をいやすことができた。かれらは貧しい読書環境のもとにおかれている同胞や郷里の友にあてて、自分が読んだ新刊の書籍・新聞雑誌を郵送する労を惜しまなかった。新聞雑誌も一度で読みすててしまうには、余りにも貴い知識の糧であり、情報源だったのである。

山川均の父親が家中のものに『八犬伝』を読んで聞かせるといった団欒図は、明治初期にはきわめてありふれた家庭風景のひとつであった。そこでは書物は個人的に読まれるものとしてより、家族共同の教養の糧、娯楽の対象として考えられていたのである。山川均のばあいは郷里を離れて京都の同志社に入学したときに、この共同的な読書環境の拘束から解き放たれ、広大な活字の世界のただ中にたった一人で入り込んで行くことになる。それは彼に限らず、立身出世を夢みる明治青年に共通した運命にちがいがなかった。かれらは維新の変革によって自信を失った親達とはべつに、新しい生き方、価値観を自分自身で模索しなければならぬ。かれらの人生の方向を決定したものは、両親から授けられる教訓ではなく、一冊の書物なのである。国木田独歩の『非凡なる凡人』の主人公桂正作は、没落士族の子弟であるが、たまたまスマイルズの『西国立志編』を読んで発奮し、独立独歩の精神にめざめることになっていた。明治青年と書物との出会いの意義は、この桂正作の生き方にもっとも典型的なかたちであらわれている。

音読から黙読へ——近代読者の成立

1

現代では小説は他人を交えずひとり黙読するものと考えられているが、たまたま高齢の老人が一種異様な節廻しで新聞を音読する光景に接したりすると、この黙読による読書の習慣が一般化したのは、ごく近年、それも二世代か三世代の間に過ぎないのではないかと思われてくる。こころみに日記や回想録の類に明治時代の読者の姿をさぐって見るならば、私達の想像する以上に音読による享受方式への愛着が根づよく生き残っていたことに驚かされるのである。

無政府主義の指導的理論家として知られている石川三四郎(明九年—昭三十三年)は、戦後執筆した『自叙伝』の中で、少年の頃祖母の寝物語に聞かされた楠公記や大岡政談から受

けた感銘を記し、つづいて父と兄との睦まじい読書風景に触れて、文明開化の風潮が中仙道筋にあたる地方豪家の知的雰囲気をもってゆく状況を興味深く語っている。

父なども兄にいろいろな本を読ませて聞くことを楽しみにして居り、例えば昔の漢楚軍談とか三国志とか言うものを読ませて居つたのを記憶しています。後には福沢論吉の『学問のすゝめ』という書物を東京から買って来て読ませたこともありました。

(同書、上、三二頁)

この漢楚軍談や三国志は貸本屋から借りたものかもしれない。この時代には大部の読本や軍記物を所蔵している一般家庭は異例に属し、それだけに貸本屋や知人から借り出した際には、家族こそって読書の娛しみを頒ち合うのが、ふつうの事だったらしい。山川均(明十三年—昭三十三年)の『ある凡人の記録』にも、このような小説の読まれ方が示されている。

私の少年時代には、子供の読みものは少かったし、(中略)木版時代の本屋が消滅したあとに、田舎ではまだ活版時代の新しい本屋は生れていなかった。それで小学校のころ、私は新聞の広告を見て、博物の書物がほしくなり、わざわざ東京の富山房(?)から取りよせたこともあった。なにか特別の家でもないかぎり、どこの家庭にも蔵書というほどのものはなく、私のところでも『論語』や『孟子』『唐詩選』とか『日本外

史』といったたぐいのものがいくらあつたにすぎなかった。懇意な家に『八犬伝』があつたので、一と冬『八犬伝』を借りて来て、毎晩、父がおもしろく読んでくれるのを、母は針仕事を、姉は編物をしながら、家内じゅうで聞いたことがあつた。ところが一二年すると、久しぶりにまた『八犬伝』でもというので、また借りて来ておさへえをするというありさまだつた。『山川均自伝』一五七―一五八頁)

一葉の日記には明治二十四年から二十五年にかけて、彼女が母親の滝子に小説を読み聞かせている記事が数ヶ所現われる。ちなみに二十五年三月は一葉の処女作『閨桜』が桃水の紹介により「武蔵野」誌上に発表された月にあたる。

日没後母君によしの拾遺読みて聞かせ奉る。(明治二十四年九月二十六日)

此夜小説少しよみて母君に聞かし参らす。(明治二十五年三月十二日)

夕飯ことに賑々しく終りて、諸大家のおもしろき小説一巡母君によみて聞かしまいらす。(明治二十五年三月十八日)

日没後小説二、三冊よみて母君に聞かし参らす。(明治二十五年三月二十四日)

石川三四郎の家は本庄の戸長、山川均の家は旧幕時代に蔵元を業としていた倉敷の旧家、一葉の亡父は警視庁の官吏、いずれも知的雰囲気には事欠かぬ中流の家庭である。それでお、小説は個人的に鑑賞されるものとしてより、家族共有の教養の糧、娯楽の対象として

て考えられていたらしいのである。そして、このような団欒の形式を私達は漸く忘れ去るうとしている。

この読み手と聞き手とからなる共同な読書の方式は、日本の「家」の生活様式と無関係ではないと考える。それは夙にラフカディオ・ハーンが「日本人の生活には内密といふことが、どんな種類のものも殆んど全く無い。(中略)そして紙の壁と日光との此の世界では、誰も一緒に居る男や女を憚りもせず、恥づかしがりもせぬ。為す事は総て、或る意味において、公に為すのである。個人的慣習、特癖(もしあれば)、弱点、好き嫌ひ、愛するもの憎むもの、悉く誰にも分らずには居らぬ。悪徳も美德も隠す事が出来ぬ。隠さうにも隠すべき場所が絶対無いのである。」と指摘したところのプライベートヴァシイの欠如を基調としている。ごく近年まで小説の読書を批難の眼で見るとまでは行かないにせよ、好もしいものとして迎え入れようとはしない家庭が少なくなかったが、それは小説自体の影響力とはべつに、小説とともにひとりの世界に閉じこもることが、ハーンの言うような家庭全体との連帯感を疎外する行為を意味したためではあるまいか。儒教道徳の規制が厳しかった明治初年には小説の地位はいわば「玩具」同様に貶しめられ、事実草双紙のごときは、家族全体で楽しむ室内遊戯のように読まれたのであつた。長谷川時雨(明治十二年―昭和十六年)の『旧聞日本橋』は、明治十年代から二十年代にかけての下町中流家庭の日常生活を刻明

に記録した興味深い書物であるが、それによると、夕食後奥蔵前の大火鉢のある一室に、家中の女・子供・女中が集って、行燈で影絵を写したり、きしやごはじきをしたり、縫物をしたりして団欒のいっときを過す、祖母がその首頭をとり、ときには修身談を聞かせる、そういう雰囲気の中で草双紙が読まれたという。幼年時代、祖母・母・姉などから受けた草双紙の絵解きに、捨てがたい郷愁を感じている明治人は少なくない。

音読の習慣はまたこの時代のリテラシイの水準が低かったことと結びついている。これは中流以下の階層、とくに婦女子の読者の読書状況を考える場合、見逃せない事実である。明治初年における民衆の読み書き能力がどの程度のものであったかを具体的に伝える資料はきわめて乏しいが、一例を挙げて見ると、明治二十一年、石川県で行った全壮丁の教育程度の調査²⁾では、壮丁四五八三人の中、往來物の読み書きができる、いいかえれば自主的に読書できる能力を備えるものが一八六九人、約四一パーセントという比率である。明治五年の新学制を通過して成年に達した最初の世代が、このような低い率を示しているのである。女子の教育程度は男子のそれより更に低く、そのことはたとえば明治二十年の学齢児童就学率が、男子約六〇パーセントに対し、女子はその半ばにもあたらない約二八パーセントという数字に端的に現われている。幕末仙北町の寺子屋で第一の才女といわれた石川啄木の母は生涯に四五通の平仮名の手紙を残しているにすぎないし、甲州の農民の娘で

あった一葉の母は、漸く仮名のにじり書きで帳付けができる程度であったという。¹⁾『当世書生気質』の芸妓田の次が朋輩の投げ出す「いろは新聞」を「小声ながらに読」んでいようように教育程度の低い婦女子がひとりでものを読むときには、小声の拾い読みがふつうであるが、この読書能力の貧しさは、他人が読むのを耳から聞く、安易で間接的な享受方式に馴化させることになる。もともと近世の貸本読者、とくに人情本の読者のばあい、このような享受の態勢は珍しいことではなかった。たとえば、『英対暖語』には紅楓お房の姉にその情人峯次郎が人情本『其小唄比翼紫』を蚊帳の中で読み聞かせている場面がある⁵⁾し、『春曉八幡鐘』には深川の芸妓達が昼間の退屈しのぎに貸本を読み合う場面があり、⁶⁾『処女七種』には舟宿の主婦が妹に人情本の朗読をせがまれる場面がある。春水の作中におびただしく挿入されているこの種の読書の場面は、人情本読者の実態を如実に伝えているばかりでなく、反面、春水が自作の読み方、娛しみ方の手引きを読者に提供していることを示している。そして、これは春水の聴覚的なスタイルの秘密を解く鍵の一つとなるであらう。⁸⁾

商業主義化した出版企業と結びつき、貸本屋の回路を通じて大量に流布された近世後期の戯作小説は識字者の限界を超えて、その周辺に潜在的読者をつくり出す。柳田国男は独自の含蓄に富む表現で音読による享受方式は口承文芸の伝統をひくものであると語って



深川芸妓の読書風景(『春暁八幡鐘』より)

いるが、ここにいう潜在的読者は口承文芸によって文芸への関心を育てて来た民衆の間に記録文芸が浸透してゆく過程に現われるものと考えてもいい。それは読みのへの関心と欲求を備えながら、自主的に読書する意欲と能力には乏しい読者であり、端的に言えば、ひとりて読み解く努力を惜しみ、耳から聞いて楽しむとする読者である。この潜在的読者の獲得にもっともめざましい働きを挙げた近世小説のジャンルは、主として婦人読者とその対象に選んだ人情本であると考ええる。人情本の読者は歌舞伎・音曲・噺・講談等、民衆演芸の複製・縮冊・再現を紙上に求める読者であり、森山重雄氏のことをかりるならば「なじみの視

聴覚的な予備状況によって地ならしされている」読者なのである。民衆演芸的要素を多量に取り込んでいる人情本の場合、作者と読者の関係は、高座の演者と聴衆の関係にその原型を持つことになる。為永春水は乾坤坊良斎と組んで高座にのぼり、自ら『梅暦』を口演したと伝えられているが、この事実は春水の作品が小説としてより、円朝の口演速記に近いものとして理解されるべきことを示唆するものであろう。

ところで活版印刷術の導入により、廉価な出版物が木版印刷の時代とは比較にならない規模で供給され始めた明治初年は、識字者とそれを上廻る潜在的読者層というアンバランスが拡大再生産された時期にあたる。また、めまぐるしい文明開化の世情は、おびただしい量の情報の消化を民衆に要求する。村の有志が村人を集めて新聞記事を読んで聞かせる「新聞解話会」や、僧侶・神官が新聞や三条の教憲にもとづいて民衆に文明開化の情報と、王政復古のイデオロギーを説いて聞かせた「説教」は活字コミュニケーションに口話コミュニケーションが継ぎ足されたものであって、この過渡期におけるコミュニケーション市場の不均衡が産出した畸形的な機関に外ならない。小学校に通う子供に新聞を読んでもらったことが刺戟になって親が新聞をとって読み始めた、そういう類の記事が一種の美談として、新聞を賑わす時代だったのである。一方、明治十年頃を境に貸本の戯作小説は、小新聞の「つづき物」にその読者を譲り始める。毎朝配達される新聞の便利さが、三日毎に

大風呂敷を背負って継本に廻る貸本屋を旧弊の遺物にかえたのである。そして、小新聞が家庭内に浸透して行った時、それはやはり声に出して読まれ、耳で聴かれるものであったらしい。つきにあげるのは、商家の娘が若い番頭に「つづき物」の朗読をせがむ場面である。

其帳合は晩にして奥へ来て新聞を読んで聞しておくれ昨日の続きが出てゐるからと急き立てるを三之介は押とめ読でお聞せ申しもませうが貴嬢は兎角に色咄や情死ものがお好で為になる咄を聞きなさらぬ故新聞を買ふのも無益であります(阿本起泉『花岡奇縁譚』初編下、明十五年)

『当世書生氣質』にも同様の場面が挿入されている。第十五回、花魁の顔鳥が客の吉住に読売新聞を読んで聞かせて貰う箇所である。

家族が一室に集って小説をともしに娛しむ享受形態は、茶の間に置かれた一台のラジオに家族全員が聴入り、夕食後のいっときを過すという享受形態を連想させる。携帯に便利なトランジスタ・ラジオが発明され、テレビが茶の間の主役になりかわった昭和三〇年代に入ってから、この共同的なラジオの享受形態は解体し、ラジオは個室や寝室に持ち込まれ、そこで個人的に享受されることになった。それに伴って、ラジオ放送の内容もアナウンスの技術も変化し、たとえば深夜放送のアナウンサーは囁くようにたったひとりの聴手に向って語りかけ、仮構された私的なコミュニケーションの場が成立する。ラジオにおける享受形態の変化が昭和三〇年代の約十年間に進行した顕著な現象であるのに比べて、小説における共同的な享受形態から個人的なそれへの推移は、はるかにゆるやかなテンポで進行したにちがいない。いいかえれば、小説の場合、共同的な享受形態と個人的なそれは、かなり長期間にわたって共存しえたはずである。

(1) ラフカディオ・ハーン『知られざる日本の面影』大谷正信訳。

(2) 「文」石川県通信、明治二十二年三月二十五日。

(3) 石川啄木『日記』明治四十二年四月十三日。

(4) 和田芳恵氏『一葉の日記』

(5) 岑「……寝て居て、私が本を読んで聞せよう。ふさ「ヲヤ嬉しいねへ。もみ「何の本でございますエ。岑「エひよくの紫といふ人情本サ……ふさ「ヲヤそれぢやアはじめツから巻末まで読でお聞せなさるヨ。もみ「ヲホ、々、お房さん、左様お言ひでも、一冊も聞いてお在の間に寝ておしまひだらう……(『英対暖語』第八回)

(6) 憂事と嬉しきことを睦しく朝夕かたる恋の中裏其中にしもとり別ていと睦しき一構美人の揃ひし二階の風情……是より嬢どもは顔をあらひ、髪を撫上、種々用をなしながら雑談の体と見るべし……●「オヤそれだね昨日よみかけた後を読んでお聞せな。ヨウ後に何ぞ来ると奢るから……■「アレサおみらも聞たいから読んでおくれヨ後に急度御馳走をするから▲

「もの好きな嬢だノウこれよりか黄金菊の二編目を読むぢやアないかト中本を出す●「マアそれよりか其大きい本をお読なねへ▲「ハイ〳〵左様ならよみませうドレ〳〵エ、何所まで読んだつけかヲ、此条だ〳〵『春暁八幡鐘』第十七章」

(7)おとよ「オヤそりやア読本とやらだねえ。おろく「あゝ好文士伝と云ふ為永の新作だよ……おとよ「オヤ夫れじやア面白いねえ。姉さん私にも些と読んでお聞せな。おろく「あゝその代り読み質に嘉喜餅でも焼くなら。おとよ「かき餅でも何でも焼くから。おろく「それでお茶も拵へるのだよ。おとよ「オヤ大そう高い読賃だねへ。ホ、ホ、ホ、おろく「それだつて読むにやア息が切れるものを。そして当世な所やまた婀娜な所があると直きに身に引き比べて恍惚たがるから困るよ。それだから余程読賃を余計に為ないぢやア合はないね……

〔処女七種〕第二十五回)

(8)春水の人情本のスタイルが音読を前提にしていたことは、句読点の切り方に端的にあらわれている。たとえば『春色梅児誉美』第一齣で、米八が丹次郎の隠宅を訪ねるくだり、「わちきやア最。知れめへかと思つて胸がどきどきして。そしてふ急いで歩行たもんだからア、苦しいトむねをたゝき……」の二つの「。」は米八が息を切らしてものをいう様子を模写するための句切りであつて意味上の句切りではない。

(9)「……以前の人は声を出して本を読みました。それで一人が読むと他の多くの者が面白く聴き、平がなさへ読めぬ者までが、一同に今いふ文学を味ふことが出来ました。是は文字の教育が普及せぬ以前、人が暗誦をして口から耳へ承け継いで居た名残りと私たちは見て居り

ます。(柳田国男「女性生活史」四、「婦人公論」昭十六年四月)

(10)三馬の滑稽本が可楽の落語と交渉を持つことは周知の通り。なお洒落本と浮世物真似等の演芸との交渉については本田康雄氏「会話体の洒落本の成立に就いての試論」(『国語と国文学』昭三十四年十一月)、合巻と歌舞伎との交渉については鈴木重三氏「合巻物の題材転機と種彦」(『国語と国文学』昭三十六年四月)をそれぞれ参照。

(11)森山重雄氏「江戸小説の問題点」(『国語と国文学』昭三十六年四月)。

(12)「関根只誠翁曰く予が若年の頃慥かに天保十一年の十月頃歎と覚ゆ下谷山下の床店にて為永春水乾坤房良斎と割看板にて書き出しに春水留に良斎真中に世話講談人情話と認めてあるを見たり(中略)春水は訥弁にて是も七十余の老人ゆへ音色も低く誠に聞苦しかりし殊に梅暦を講ぜしかば題と人と相適はず一層索然たる趣ありし(下略)」(春のや主人「為永春水略伝」『中央学術雑誌』明十九年二月一日)

(13)たとえば「読売」明治十年四月五日、同明治十年四月二十三日。

明治初年、なお広範囲にわたって温存されていた、一人の読み手を囲んで数人の聞き手が聴き入る共同的な読書形式は、日本の「家」の生活様式——ブライヴァシイの欠如、民

衆のリテラシーの低さ、戯作文学の民衆演芸的性格等の諸条件にもとづいていた。ただし、この場合、声に出して読むことは読みものへの欲求を潜在的に持つ複数の聞き手を同時に満足させる有効な伝達手段にはちがいがなかったが、そのことは直ちに読み手の側に音読それ自体に興味と関心を集中するだけの強い内的動機が働いていたことを意味するものではない。実語教・往来物の習字に国語学習の目標を置いた寺子屋教育の段階では、文章を讀誦し、その律動感に陶醉しうる能力は埒外にあった。文章のリズムを味にする感受性、文章を朗誦し耳から聞くことによるこびを見出す能力の有無は、漢籍素読の体験の有無とかわってくるのである。

ここで叙述を整理するために「音読」そのものを二つの型——ひとつは伝達手段として、また理解の補助手段としての「朗読」と、もうひとつは文章のリズムを実感するために音吐朗々と誦する「朗誦」——に分けて考えたい。第一の型「朗読」は主として民衆の側に見出され、家族ぐるみでの共同の読書形式に適應性を示す。戯作小説・小新聞の「つづき物」・明治式合巻・講談の速記等の文学スタイルにこれは対応している。第二の型「朗誦」は漢籍の素読を受けた青年達——いわゆる書生の側に特徴的であり、学校・寄宿舎・寮・政治結社等の精神的共同体の内部に叙事詩的な享受の場をつくり出す。これに対応するのは漢詩文・読本・大新聞の論説・政治小説等の文学のスタイルである。以下第一節では触

れなかったこの第二の型について大略の見取図を画いてみたい。

士族や地方豪族の子弟は、早いものは五才、おそくも十才前後までに漢籍の素読を始めている。幕末から明治初年にかけて幼少年期を送った人々の例を二三挙げてみると、

植木枝盛(安政四年—明治二十五年)十一才のとき、土佐の藩校文武館に入学し、四書五經の句読を授けられる。(植木枝盛自伝)

森鷗外(文久二年—大正十四年)慶応二年、五才にして藩儒米原綱善について漢籍の素読を受け、翌年津和野藩校養老館に入学する。(年譜)

徳富蘇峯(文久三年—昭和三十三年)八才の時、論語の素読を外祖父から授けられる(これより先、母から大学・論語の手ほどきを受けている)。(蘇峯自伝)

嵯峨のやおむろ(文久三年—昭和二十二年)五才の頃、父から四書の素読を受け、父が上野戦争に参加したかどで入獄してからは、兄と叔父に代り、孟子の二巻まであげる。

(嵯峨のやおむろ伝聞書)

幸田露伴(慶応三年—昭和二十二年)七才の時徒士町の金田という漢学の先生について孝経の素読を始め、お茶の水師範附属小学校に入学後も素読を続ける。(少年時代)

正岡子規(慶応三年—明治三十五年)六才のとき論語の素読を始め、八九才の頃外祖父から孟子の素読をうける。(筆まかせ)

田岡嶺雲(明治三年—大正元年)十才頃、父から小学の手ほどきを受け、やがて小学校教師の自宅に通って国史略、日本外史、十八史略等の素読を受ける。(数奇伝)

新学制が明治五年に施行されてからも、父兄の間では漢学尊重の気風が根づよく残っていたから、子弟を小学校に通学させるかたわら、家庭や塾で漢籍の素読を習わせることが多かったらしい。「教師の自宅へ通つて、科外に漢籍の稽古をする事が競争的に行はれた」(数奇伝)。幸田露伴は朝暗いうちに起きて、蠟燭の光の下で大声を揚げて復読をすませ、それから登校するのを日課としていた。この厳しい訓練によって露伴は「文句も口癖に覚えて悉皆暗誦して仕舞つて居るものですから、本は初めの方を二枚か三枚開いたのみで、後は少しも眼を書物に注¹が¹ない程に熟達したという。

漢籍の素読はことばのひびきとリズムとを反復復誦する操作を通じて、日常のことばとは次元を異にする精神のことば——漢語の形式を幼い魂に刻印する学習課程である。意味の理解は達せられなくとも文章のひびきとリズムの型は、殆ど生理と化して体得される。やや長じてからの講読や輪読によって供給される知識が形式を充足するのである。そして素読の訓練を経てほぼ等質の文章感覚と思考形式とを培養された青年たちは、出身地・出身階層の差異を超えて、同じ知的選良^{エリート}に属する者同士の連帯感情を通わせ合うことが可能になる。しかも漢語の響きと律動に対する感受能力の共有を前提に、漢詩文の朗誦・朗吟

という行為が、あたかも方言の使用が同じ地域社会に棲息するもの同士の親近感を強化するようになり、この連帯感情を増幅する作用を示すのである。

立身出世を夢想して全国から東京に蝟集した青年達は、一旦漢学塾に籍を置くものが多かった。「官学校——陸海軍兵学校、法律学校——へ入学するには漢学の必要があつた」(片山潜『自伝』)からである。また漢学塾は賄料が廉かつたので、書生達は下宿代りに入塾し、そこから志す学校に通学したのである。田山花袋は『東京の三十年』で書店有隣堂の小僧を勤めていた少年の頃の想い出に、兄が修業に出ていた漢学塾の窓の下に佇んで「湧くやうな読書の声」を羨しく悲しく聞いたことを記しているが、明治十年代の東京市内には、中村敬宇の「同人社」、三島中洲の「二松学舎」、杉浦重剛の「称好塾」、向山黄村の「黄村塾」、岡鹿門の「岡塾」、芳野世経の「芳野塾」等を始めとして、「漢学の塾は……：到る所にあつた」(同上)。「湧くやうな読書の声」はこの私塾ばかりでなく、書生の下宿にも高らかに響きわたっていた。「読売新聞」明治十年三月十三日号の投書に、

日本の人が在来の書籍を読むのは西洋の様に文法もなくコンマも無くセミコロンも無くフルストップも無く其読声も銘々勝手に奇妙稀代な節をつけウーンエエンと志女寿の都々一の様に長いもありエ、外史氏曰エ、外史氏曰エ、外史氏曰と一ツことを五度も十度も読もあり中には順礼声どうぞや声祭文かたり声阿房多羅經ごゑなどもあり



明治書生の読書風景(『明治文化史』生活篇より)

万歳が来たかと疑はれるもあり機関の呼立かと思ふもあり是らはまだく聞いて辛抱もできるが書生の下宿などでは節々夜(マッ)夜(マッ)夜(マッ)が寝た時分に大声を発して読み他人の安眠を妨げる類は少し心を用ひて貰ひたいもの又読書の仕方は真宗の坊さんがお文を読様に句読をして少し早めに読のがい、と思はれます。

この書生達のリクリエーションのひとつに愛読する漢詩文や馬琴の読本の吟誦・暗誦があったことはふしぎではない。明治八年、新潟から上京して、大学予備門入学の準備をすすめていた市島謙吉は「其の頃東京の書生社会では馬琴の小説『八犬伝』や『弓張月』や『美少年

録」などを読むことが流行」していて『八犬伝』中のサワリ文句は多く書生間に暗記され、信乃浜路別れの一節などを暗誦が出来ないと、友人間に何となく肩身が狭く感ぜられた⁽³⁾と回想している。またやや時代は降るが正宗白鳥は年少の頃「馬琴や山陽の文体には快感を覚え、詩を朗吟するやうに音読したりした⁽⁴⁾」という。漢文崩しの格調高い文体で綴られていた政治小説も、馬琴の読本同様愛誦に堪えうる性質の文学であった。とくに要所々に漢詩を鏤ばめ、華麗な四六調を駆使した『佳人之奇遇』の美文が、ひろく書生達の間で吟誦され、人気を博したことはよく知られている通りである。同志社三百の寄宿生が予習の手を休めて『佳人之奇遇』中の漢詩の朗吟に「引き入れられるやうに聞き惚れる」『黒い眼と茶色の目』に描かれた印象的な場面はあらためて引用するまでもないであろう。また杉浦重剛の称好塾に学んだ江見水蔭が回想しているように、「軟派の小説」には見向きもしなかった漢学塾の書生も『佳人之奇遇』や『経国美談』のスタイルには共鳴し、好んで吟誦したのである。すでに触れたように漢詩文のリズムに対する感受性を共有する書生達のばあい、朗誦や朗吟はバセティックな集団感情を励起するきっかけとなり得る。このような享受の場の原型は『経国美談』や『佳人之奇遇』などの政治小説の名作が現われる以前に用意されていた。田岡嶺雲が土佐自由民権運動の下部組織ともいえるべき「社」の内部で「嗚乎三千五百万の兄弟よ」と書き起した国会請願の檄文や、波蘭滅亡の

歌などを郷党の青年達が挙って愛吟したと語っているのはその一例である。政治小説は学校・寮・寄宿舎・私塾・結社等の精神的共同体の内部で集团的共同的に享受される方式を通じて、自由民権のムードを昂揚させる触媒としての役割をヨリ有効に發揮しえたはずである。そしてそれは公衆の面前で朗誦された叙事詩の享受方式に近い性質を帯びてくるのである。

- (1) 幸田露伴「少年時代」全集第二十九卷、二八〇頁。
- (2) 漢学塾の実態は片山潜『自伝』、安部磯雄『社会主義者となるまで』、篠田敏造『明治白話』等にくわしい。
- (3) 市島謙吉「明治文学初期の追憶」、『早稲田文学』六十四年七月。
- (4) 正宗白鳥「昔の日記」、『近代文学』昭二十一年一月。
- (5) 江見水蔭『自己中心明治文壇史』二九頁。
- (6) 田岡嶺雲『教奇伝』五八頁。

3

『孤獨なる群衆』の著者として知られるD・リースマンはコミュニケーション史の観点

から文化の発展段階を三つに分けている。⁽¹⁾第一には口話コミュニケーションに依存する文化、第二は印刷された文字のコミュニケーションに依存する文化、すなわち活字文化、第三はラジオ・映画・テレビ等の視聽覚的メディアに依存するいわゆる大衆文化である。リースマンの問題意識は活字文化によって形成された内向型の人間にかわって、映画・テレビ等の映像文化によって铸出された他人志向型の人間が登場する過程の追求にその焦点が合わされているのであるが、さしあたりここでとり上げたいのは、彼が第一と第二の過渡期、活字が口話コミュニケーションを複製する手段として併用されていた時代を考えているということである。

リースマンはビューリタニズムとの関聯において黙読の習慣の成立を捉えようとする。印刷術の発明された十五世紀から、ビューリタニズムのもとに個人的、内面的な読書的方式が一般化する十八世紀までは、活字文化の前期ないしは準備期として規定されるのである。「じつにグーテンベルグが出た後でさえ、現代の読書の方式が一般化するまでには長い時を要した。書物は独りで読まれる時ですら、声をあげて朗読された。そのことは文字が発音通りに自分勝手に綴られた(ジョンソン博士の辞書が正字法を統一するまでは)ことにも示されている。印刷された行をななめに、頭を校のように素早く動かしながら、黙ったままで脚光を浴びない内密な読み方することを学んだのは——これはいかにも彼等然

としてゐる——清教徒ピュリタンである。このように比較的時代がくだってから始めて印刷された書物が外への扉と同じく内への扉を開いたのであり、他人の存在という喧騒から孤独へと人を誘つたのである。⁽²⁾黙読によって書物が享受される時代に、音読の習慣が卓越する時代が先行することは、リースマンのような社会学者ばかりでなく、読者層の問題に關心を寄せる文学史家の側からも指摘されている。たとえばイギリスのばあい、エリザベス時代には、詩はもちろん、散文でさえ朗読による実演を顧慮して書かれたのであり、活字の機能を完全に駆使した文学のスタイル——散文の小説は、十八世紀初頭ジャーナリズムの発生とともに漸くその姿を現わすのである。⁽³⁾一方、十七世紀には読書といへば、それは殆ど例外なく声を出して読むことを意味していた(句読点の切り方は構文ではなく、発声にもとづいていた)。またドイツのばあい、父親や母親が、子供達に本を朗読して聞かせている場面は、市民の家庭風景を描いた十八世紀の通俗画が好んで取扱う画題のひとつであった。⁽⁴⁾

日本のばあい、活版印刷術の移入に先立つ木版整版印刷の期間が、ほぼこの音読の時代に対比しうると考へる。そして活版印刷と木版印刷との交替期にあたる明治初年は、リースマンのいう口話コミュニケーションの段階から活字コミュニケーションの段階への過渡期、それもその最終期であつたと規定されよう。印刷された文字は自律的な媒体メディアとしての

機能を充分に發揮しえず、口話コミュニケーションの複製ないしは再現の手段としての役割をなお兼帯していた時代なのである。このことは、いかえるならば、活字が個人的なコミュニケーション様式として作用する一方、家族共同体・地域共同体・精神的共同体等、集団を単位とするコミュニケーション様式として作用する場合も少なくなつたことを意味している。家族共同体における戯作小説や小新聞、地域共同体における新聞解話会、精神的共同体における政治小説は、それぞれこの集団的・共同的な享受方式のあり方を典型的に示しているものであろう。

この音読から黙読へという享受方式の移行過程を、同時代人のひとりとして、大まかながらかなり正當に認識していたのは坪内逍遙である。明治二十四年四月「国民之友」誌上に掲載された「読法を起さんとする趣意」はいわば逍遙の文学的経歴の曲り角——小説改良から演劇改良へ——で書かれた論文であるが、ここで注目したいのはその文学享受の理論としての性格である。

逍遙はこの論文の冒頭で、上古の時代は印刷術も無く用紙も乏しく著作の流布に困難をきわめたために「朗誦朗読の必要」が起つたと述べ、ホーマーやヘロドタスの名を挙げつ「節奏文」(韻文)が「無調の文章」(散文)に先立って現われたのは、この朗読という発表形式と関聯していると説明する。続いて逍遙は自問自答の形式をかりて論をすすめながら、

現代は上古とは異なり、教育が普及し、印刷術が発達した結果、「一篇の文章の忽ち化して数万の印刷物となり同時に億万人に黙読せらるる世」になったとし、「昔人こそ耳をもて他人の作を読みもしたりけめ今人は目もて読み得べき便宜を得」ている以上、学習の方法、あるいは他人への伝達的手段として理解されていた従来の朗読法が、無意義なものに化しつつあることを指摘する。ここで逍遙は「人性研究法」の一端に応用しうる新しい読書術Ⅱ「論理的読法」を提唱するのである。その原則は「文章の深意を穿鑿し（批評）否むしる其文の作者若くは（院本ならば）其人物の性情を看破し（解）（釈）自家みづから其作者若くは其人物に成代りたる心持」で読むことにあり、それは音読の際とはもかく、「黙読の際には必ず用ゐざる可」からざる原則なのであった。この原則の上に立って表現過程に重きをおくものが「美読法」である。それは黙読による享受方式が支配的になる大勢を前提に、今まで習慣化していた享受方式である朗読を一旦否定し、あらためてそれを演劇的表現につながる朗読法として再生させたものなのである。したがって、それは「原作者の本意をして朗読の間に活動せしめ」るものでなければならず、「文の情と相応相伴して緩急の句読(pause)に注意し声の抑揚高低弛張(emphasis)に注意し哀傷奮激等の情を其声の色にあらはさんとする心得」を必要とする（「美読法」を適用しうる文章として逍遙は言文一致の文章と「傑作」の脚本をあげている）。形式から入って内容に到達する

「素読」とはまさに逆の行き方なのである。

この「論理的読法」は文章の形式美の風味よりも、形象の把握に力点を置いているかぎり、正当な散文享受の姿勢を読者に示唆しているものといえよう。また作者ないし作中人物に同化して、その思想・感情を追体験する「論理的読法」に堪えうる文学作品は、当然のこととして、作者の強靱な自己表現の意欲に貫かれた峻しい性格造型が要請されなければならぬ。逍遙は期せずして「近代」の小説読者の享受態勢を規定していたわけである。では現実、明治二十年前後の文学近代化の動きと、読者の享受相の変革とはどのようなからみ合い、又切り合っていたであろうか。

- (一) D. Riesman: *The Oral Tradition, the Written word, and the Screen Image*. 1955.
Books-Gunpowder of the Mind. (Atlantic Monthly 1957. 2所収「アメリカナ」誌に邦訳
 あり)

(二) *The Oral Tradition, the Written word, and the Screen Image*. 1955.

(三) I. Watt: *The Rise of the Novel*. 1957. p. 190.

(四) Q. D. Leavis: *Fiction and the Reading Public*. 1932. p. 218.

(五) L. L. Schucking: *The Sociology of Literary Taste*. Eng. tr. 1944. p. 72.

明治二十二年四月、新著百種の第一編として刊行された紅葉の出世作『二人比丘尼色懺悔』をめぐる数々の批評の中に、翌五月京童子と名乗る一投書家が「出版月評」に寄せた文章がある。京童子は『色懺悔』の文章を「古雅の分子その多分を占めいくたびもくりかへし読む程にますますその味はひの深さを覚ゆ」と称揚したあとで、「左れど文章きれ／＼の句多く之を読むをり口に上りかぬるは遺憾なり因より小説は語にもあらず淨瑠璃にもあらねどさらばとてかゝるきれ／＼の句のみにては誦読の際読者に快楽を与ふること少かるべしと思ふなり」と幾分かの不満を洩らしている。「文章きれ／＼の句多く」という印象は短句を矢継ぎ早にたゞみかけてゆく紅葉新案の文体に対する反撥と思われるが、それは小説の文章が「誦読の際読者に快楽を与ふる」ものでなければならぬとする認識を前提にしている。

ここに現れているのは音読による享受方式と不可分に結びついた文章感覚である。文章の形式美のみを切り離して心ゆくまで翫味しようとする鑑賞の姿勢である。このような姿勢は文章の向う側にある観念と形象の動きを迅速的確に捕捉する読解作業へと導くものではない。そしてまたこの種の文章感覚に対して適性を發揮する文章は、単純透明な表現を志向する散文ではなく、たぶんに韻文的裝飾を凝らした美文でなければなるまい。京童子のばあい、「小説は謡にもあらず淨瑠璃にもあらず」と言いながらも、じつは小説の文章の軌範をこれらの語りものの線に引寄せて理解していることは明瞭であろう。当時の常識を代入するならばそれはほぼ「流麗を固有とした」馬琴の文章に相当するはずである。

『色懺悔』の雅俗折衷体ですら不満を抱いた京童子のごとき、保守的読者が言文一致体で書かれた小説に接してその「格調の乏しき、韻律の欠如」に反感を持ったことは想像に難くない。言文一致運動の主唱者のひとり山田美妙は、機会あるごとに、文章のリズム（彼の用語では「語調、声調、音調」）の問題をとりあげ、このような読者の素朴な反感に対して弁駁を試みている。その反論は二つの方向からなされた。一つは散文を韻文のように読む鑑賞方式への批判であり、もう一つは韻文のリズムとは異質な次元に立つ散文のリズムの確認である。美妙の言文一致論が包含するこの一種の読者論は、明治二十年前後における作者対読者の関係を側面から明らかにすることになるだろう。

明治二十年六月に執筆されたという『賈金剛石』序文の中で美妙は夙くも新しい鑑賞方式の提唱を試みている。すなわち、従来わが国で書物の「読方」と「通常の談話態」^{はなしがた}とが別途に考えられていたのは誤りで、この言文一致体で書かれた小説は「通常の談話態」

に従って読んでほしい。その方が面白く読まれるというのである。この朗読法の改良意見は「言文一致論概略」(『学海之指針』明二十一年二月、三月)でさらに周密を加える。美妙は古文の優美な音調を盾に取って俗文の陋しさを責める非言文一致論者の批難は謬っている。それは「音調を主眼」とする詩歌を基準として文章を考えているもので、文章は「音調を主眼」としないと説き、ついで「俗文は口で言ふ儘に書き做してある物」だから「日常の会話のやうに読むのが当然」であるとする。このような鑑賞方式改良の主張は「文と語調」(『以良郡女』明二十二年十二月、二十三年一月)のやや混濁した解説を間にはさんで、「吾々の言文一致体」(『しがらみ草紙』明二十三年五月)において、韻文リズムとは異なる散文リズムの確認へと発展する。この論文は直接には鷗外の「言文論」への反論として書かれたものであるが、彼が言文一致の原則として掲げた十三ヶ条の中、最後の三ヶ条が散文リズムへの言及を含んでいて注目される。

(十二) 文を誦して決して決して其意を尽さぬのは渋滞です。文を称して決して決して其意を尽し得るのは不渋滞(仮称)不渋滞と楽調とは猶異なるべきものです。

(十二) 其情を尽しても其声は必ずしも楽調ではありません。不渋滞で真意は誦しても猶楽調ではありません。

(十三) 散文から起る発音(誦誦)の最上は不渋滞です。韻文から起る発音(唱誦)の最上は楽調です。

美妙は読者の享受過程に立脚して散文のリズムを規定しようとする。読者の内面において「意」が理解され、「情」が喚起される、(意を尽し、情を尽す)ためには、誦誦という行為の円滑な進行(誦して決して決して)が必要にして望ましい条件なのである。誦誦のつまりずき(渋滞)は理解を鈍らせ、感動を妨げる。そのような躓きをもたらさない、文章の流れ、なめらかさ、一定の歩度、そこに美妙は散文リズムの徴表(不渋滞)を求めようとする。つまり散文のリズムは「意」及び「情」を濾過するフィルタアの問題として処理されているのであって、「意」及び「情」のさまざまな様相に応じてそれ自身微妙な変化を遂げる有機体としては扱えられていない。このような内容形式を統一的に理解することなく、別箇に切り離して考察する態度は、日本の詩の律格について少なからぬ創見を披瀝した『日本韻文論』にさえ現われている。内田魯庵が『韻文論』に加えた批判「美妙は詩に声調ありと説て声調を起すの想なるものありしを知らず」(『詩弁—美妙齋に与ふ』「国民之友」明二十四年一月三日)は、詩と韻文の定義をめぐっての誤解が双方にあるにしても、美妙の理論的欠陥を衝いたものとして正当であり、二、三の語を組替えるならば、これは散文リズムの規定の不完全さを指摘したことばとしても有効である。

言文一致論に対し傍観者の態度を持していた鷗外ですら「夫れ韻文は之を歌ひ之を誦せ

むために作るものにて猶耳に待つことあり散文は読ませむためにて唯、目と心に待つのみ〔言文論〕といい、散文が原則的には黙読によって享受されるべきであるという理解に達していたのだが、美妙は必ずしも音読への拘泥から脱し切れていたわけではなかった。美妙のいう「読む」は「吟ずる」と対立する概念ではあっても、黙読を意味していなかったことは、「文と語調」に見る通りであった。すくなくとも美妙のばあい、散文のリズムは読者の「声」の問題に外ならなかったのである。

言文一致体の文章が「話コトバを用いて書く」、あるいは「話コトバのまゝに書く」という意識から転じて、「話すように書く」という意識のもとに創出されたとき、いいかえれば言文一致体の「言」が「話コトバ」一般ではなく、作者の主観を潜りぬけ、作者固有の口調を帯びた「話コトバ」に限定されたとき、それは始めて近代の小説文体としての資格を獲得したのであった。⁽³⁾ 作者は韻律や格調の粉飾を洗い流して、彼じしんのいわば「裸の声」でじかに読者にむかって語りかける。それは作者の個我の自覚、内面の衝迫が要求し、選び取った方法でなければならぬ。このばあい、散文のリズムが読者の「声」の問題としてよりも、先ず作者の「声」の問題として提起されたのは当然であろう。このような問題意識は逍遙から二葉亭へとつらなる系列のうちに辿ることが出来る。そして二葉亭の『浮雲』や『あひびき』が、鑑賞方式の改良をこちたくあげつらった美妙の実作以上に

読者に対して享受の姿勢の変革を迫る実効性を具えていたことは、文学史上の一つの皮肉といえるかもしれない。

(1) 山田美妙「馬琴の文章略評」(『新小説』明二十二年四月十日)参照。

(2) ハーバート・リード『散文論』参照。「リズムはもっとも深いものだ。リズムは語によってではなく思想によって生れ、思想に伴う本能と情緒との何らかの集合によって生れる。思想が生ずると同時にリズムが或る形をとる」(田中幸穂氏訳同書、二六頁)。

(3) 阪倉篤義氏「話すやうに書く」といふこと」(『国語国文』昭三十二年六月)参照。

5

高瀬文淵君には、私は二十五年頃いろいろ御世話になつたが、その文淵君の口から、私は二葉亭氏の偉い人格であるといふことを常に聞いた。『君長谷川君には是非一度逢つて置きたまへ。日本には実に珍らしい人物だ』かう言つて、文淵君は『浮雲』第三編の『都の花』に載せられたあたりを、節のついたおもしろい調子で読んで聞かせて呉れた。(『二葉亭四迷君』坪内逍遙、内田魯庵編『二葉亭四迷』)

田山花袋が二葉亭を回想した文章の一節である。文淵は花袋が『東京の三十年』の中で、

「氏から鼓吹された文学的感化は、それは実に予想外に深かつた」と語っている人物であるが、ここでは文淵が花袋に、二葉亭の『浮雲』を「節のついたおもしろい調子」で朗読して聞かせていることに注意したい。文淵には「散文小説は尚高座の講談の如きか。其情激揚して演者或は詩中の人となることはあれども、其性質たる到底談話の領域を脱せざるを奈何せむ」(『文学意見』)というような見解があり、明治二十六年に発表した言文一致小説『若葉』を、花袋に読んで聞かせたことがあったという。

このエピソードは、ふつう黙読によって『浮雲』を読み慣わしている私たちに、ある示唆を与えてくれる。『浮雲』という作品は、高座で語られる人情噺のイキで、うけとめるのが本来の読み方なのではあるまいか。すくなくとも『浮雲』の文体が、語る文体、声を伴った文体であることを、もういちどあらためて確認する必要があるかもしれない。

十川信介氏は、『浮雲』の世界(『文学』昭四十年十月)で、円朝ないし落語の形式に付随する「語り」の要素が、『浮雲』の前半に持ちこまれていく徴表として、(1)作者が直接作中に顔を出し評を下す、(2)話の段落に作者が出て来て挨拶する、(3)読者に共感を求めたり、呼びかけたりする感動詞の多用、の三点をあげている。『浮雲』の前半では、作者は「冷やかな傍観者」であり、それ故に「当事者に成り変つて」、読者に挨拶したり、説明を加えたりする「演技」、作中人物に扮する「演技」が必要だったというのだ。

しかし、十川氏が触れなかった「語り」の徴表として、

もうひとつ、『浮雲』における擬声語・擬態語の多用をあげておかなければならない。たとえば第一回で文三が園田家に到着するところの文章である。

高い男は玄関を通り抜けて縁側へ立出ると、傍の坐蒲の障子がスラリ開いて、年頃十八九の婦人の首、チョンボリとした摘ツ鼻と、日の丸の紋を染抜いたムツクリとした頬とで、その持主の身分が知れるといふ奴が、ヌツト出る。

いうまでもなく、擬声語・擬態語は、音声表象をかりて、対象の実態を感覚的に伝達しようとするときに選ばれることばであって、それは文章よりも、はなしことばの中にとり入れられたときに、より効果的に作用する。円朝の『怪談牡丹燈籠』でお露の亡霊が出現するサワリの部分で、駒下駄の「カランコロン」の響きが、妖異の雰囲気を巧みに誘い出す効果を發揮していることは、よく知られていると

	地の文の行数	擬声語・擬態語の数	十行につき擬声語・擬態語の数
浮雲第一篇	587	140	2.4
〃 第二篇	754	144	1.9
〃 第三篇	634	65	1.0
武蔵野	148	7	0.5
胡蝶	199	12	0.6
牡丹燈籠 1~8回	243	71	2.9

いずれも岩波文庫版による。ただし『浮雲』は旧版、『胡蝶』・『怪談牡丹燈籠』は43字詰、『浮雲』は42字詰。

おりだ。『浮雲』は『牡丹燈籠』ほどではないが、同時代の言文一致小説の中では擬声語・擬態語の頻度が、きわめて高いのである。

『浮雲』の第一篇から第三篇にかけての擬声語・擬態語の頻度の減少は、十川氏のいう傍観者から共犯者へという、作者の位置の転回と呼応している。しかし、第三篇でさえ、美妙の『武蔵野』や『胡蝶』にくらべれば、擬声語・擬態語の頻度は高いのである。

山田美妙は言文一致体小説の第二作『風琴調一節』(以良都女) 明二十年七月〜九月の「緒言」で、「一口に言へば円朝子の人情漸の筆記に修飾を加へた様なもの」と述べている。

また第一作の『嘲戒小説天狗』(活版非売本我業多文庫、明十九年十一月〜明二十年七月)では、登場する小説家が「落語家仕入か乃至は焼直の小説をエンヤラヤツと作て本屋をおだて込み」というように戯画化されていた。たとえば『武蔵野』のつぎの個所が、「円朝子の人情漸の筆記に修飾を加へ」たところに趣向があることは、明瞭であろう。

目をむむツて気を落付け、一心に陀羅尼経を読まうとしても(口の上にはばかり声は出るが)、脳の中には感じが無い。「有に非ず、無に非ず、動に非ず、静に非ず、赤に非ず、白に非ず……」其句も忍藻の身に似て居る。

これに呼応する個所は、『牡丹燈籠』の第八回にある。

……萩原は蚊帳を釣て其中へ入り彼の陀羅尼経を読まふとしたが中々読めなひ鼻竇婆

譏嘲帝嚳囉駄囉、娑訊囉捏具灑耶、怛陀摩多野怛備也陀唵素唎閉、跋捺囉嚳底嚳譏囉阿左跛囉、阿左跛囉、なんだか外国人の諺言のやうで訳がわからない……

この呼応は、美妙が言文一致の文体を創始するにあたって、二葉亭と同じように、円朝の口演速記を下敷にしたことを物語るひとつの傍証であるが、美妙のばあい、高座から聴衆に語りかける円朝の姿勢が、文体そのものの中に取りこまれていたとは、必ずしもいえないのだ。「妓にチト艶いた一条のお漸があるが、之を記す前に、チョッピリ孫兵衛の長女お勢の小伝を伺ひませう」(第二回)というような『浮雲』に見る作者の挨拶めいた語り口は、美妙の言文一致体小説では、意識的に切りすてられている。そのことは「通常の談話は、美妙の様に読(賈金剛石)序む読み方を、読者に要請した美妙の態度とかかわっていると考えられる。そのかきりで『胡蝶』や『武蔵野』は『浮雲』の第一篇に見るような戯作調の残存をまぬがれているのである。

しかし、じつは二葉亭が美妙よりも一層忠実に、円朝の語り口を取りいれようとしたところに、『浮雲』後半の緻密な内面描写が約束されることになったのだ。十川氏は前半の戯作調にやや否定的な評価をくだしているが、二葉亭が『浮雲』後半の文体を獲得するためには、円朝の語りの形式を、通過することが前提とされなければならなかったのである。

鶴見俊輔氏は、円朝の文体の特色を「明治以後の文章語の世界では失われることの多かつた『身ぶりとしての言語』」に求めている。たとえば『真景累ヶ淵』で按摩宗悦が、深見新左衛門の肩をもむ条りて、言葉として状況からきりはなしてしまえば、それほど指示機能を持たぬ「こんな」「この左の肩」というような粗雑な言葉が、一回的、特殊な状況の中にたくみにはめこまれたときには、魔力をふるって、その状況の特殊な実質に手をふれさせるといのである。先に触れた「カラコンロン」の駒下駄の音が、亡霊のイメエジを喚起する一種の身ぶりとして、鶴見氏によって指摘されていることはいうまでもない。また『塩原多助一代記』の多助と青の別れの場面では、「くりかえし、しどろもどろのくどいくどきかたが、かえて、人間には誰一人もってゆきどころのない主人公の悲しみの実質をそのままつたえる」といっているのである。

R・P・ブラックマーは、『身ぶりとしての言語』のなかで、『ハムレット』の「ながらうべきか……」の独白にある(眠ること)という言葉のくり返しと、(死ぬこと)のくり返しと呼応しながら、言葉そのものの意味より、「身ぶり」そのものとして、観客に不安と戦慄を喚起するといっている。この『ハムレット』の独白に見る「身ぶり」や、『塩原多助一代記』の「身ぶり」をおもわせるものが、『浮雲』の前半に現われていることに注意したい。

それよりかまづ差当りエート何んだツケ……さう／＼免職の事を叔母に咄して……厭な顔をするこつたらうナ……しかし咄さずにも置かれぬから思切つて今夜にも叔母に咄して……ダガお勢のゐる前では……チョツゐる前でも関はん、叔母に咄して……ダガ若し彼娘のゐる前で口汚くでも言はれたら……チョツ関はん、お勢に咄して、イヤ……お勢ぢやない叔母に咄して……さぞ……厭な顔……厭な顔を咄して……口汚なく咄……して……アア頭が乱れた……(第四回)

お政に失職を打ち明けようとする決意と、お勢の軽蔑を買いはしまいかという危惧とが、文三の心中で葛藤している。この葛藤は、「叔母」と「お勢」という言葉が、交互にくり返しあらわれることで直接的に表現される。言葉の中絶は文三の躊躇と不決断を、言葉の反復はその執着と拘泥を、長句から短句への推移は、思考のテンポの変化を、それぞれ実感させる。これは表象と観念のモザイクによって、文三の内面風景を再現しようとする分析的な心理描写の手法ではなく、懷疑し、逡巡する文三の心理的起伏を、言葉の抑揚、テンポ、リズム等の直接的、実態的な効果を駆使して、読者の感情の共振を喚起しようとするさせた作品としては、広津柳浪の言文一致体小説『残菊』(明治二十二年十月)があげられるだろうし、いささか芝居がかってはいるが、『金色夜叉』の熱海海岸の場面で、貫一が執拗

にくりかえず「今月今夜」のセリフも、この手法の一変種といえるだろう。音読よりも黙読に馴れた私たちのばあい、この手法には拒絶反応ができあがってしまっている。

もうひとつ、第九回から実例をあげる。

無念々々、文三は恥辱を取った。ツイ近頃と云って二三日前までは、官等に些とばかりに高下は有るとも同じ一課の局員で、優り劣りが無ければ押しも押されもしなかつた昇如き犬目物のために恥辱を取った、然り恥辱を取った。シカシ何の遺恨が有つて、如何なる原因が有つて。

想ふに文三、昇にこそ怨はあれ、昇に怨みられる覚えは更でない。然るに昇は何の道理も無く何の理由も無く、恰も人を辱しめる特権でも有てゐるやうに、文三を土芥の如くに蔑視して、犬猫の如くに待遇つて、剩へ叔母やお勢の居る前で、嘲笑した侮辱した。

ここには本田昇から侮辱されて、憤懣を鬱積させ、内攻させている文三の心理が、彼の内語をなぞって行く語り手の声によって増幅されている。それは「何の遺恨が有つて、如何なる原因が有つて」、「嘲笑した侮辱した」のくり返しに、端的にあらわれているといえよう。この文三の内語と軽妙な揶揄の調子をこめた作者の声を重ね合わせる手法によって、『浮雲』後半の心理描写は奥行きを加えているのである。

円朝がさまざまな登場人物を、その身分、性格、おかれている状況に応じて高座で演じて分けて見せたように、二葉亭は文三の内面の声、内面の劇を演じてみせる。第二篇における昇対文三、お勢対文三の生彩に富む応酬も、このような二葉亭の演技者的役割から、導きだされたものなのである。

ここで思い合わされるのは、外国語学校におけるグレイと二葉亭の出会いである。グレイのロシア文学の朗読は、「身振声色交りに手を振り足を動かし眼を剥き首を掉つて其脚色の光景を髣髴せしめ」たという。グレイがその肉体をかりてじかに再現したロシア文学の人間像が、二葉亭の文学に及ぼした影響の深さについてはあらためて説くまでもあるまい。グレイの朗読に感銘した二葉亭は、本を借りて帰り、おもしろい一節々々を黙読してみたが、「ノヴェルチーがなくなつた為かも知れぬが教師が読んだ時興興味がなかつた」(予の愛読書)という。「予の愛読書」ではこれにつづけて義太夫も上手な太夫が活かして語ったのはおもしろく、下手な太夫が殺して語ったのは話らぬと述べているが、教場から帰って黙読する二葉亭の耳は、なおグレイの声の残響を聞くかのように感じながら、彼じしんでは、それを完全に再現しえぬもどかしきにとらわれていたのではなかつたか。

二葉亭が円朝の癖から学びとった「身ぶりとしての言語」は、たぶんこのグレイの朗読を絶えず想起することによって、『浮雲』の文体のなかに生かされたのである(美妙はこの

ような文学体験を持たなかった。

はじめ「だ」調で言文一致体小説を書いた美妙は、短篇集『夏木立』の出版後、「です」調に切りかえる。「だ」は下流にたいする語法で、語気が荒っぽく感じられるので、「です」の中流の語法をえらんだというのであるが、「です、ます」は語り手の位相は定まっても、語り手が作中人物に同化し、語り手の声と作中人物の声とを重ね合わせることによって、心理的起伏の微妙な推移を立体的に再現する方法は望めなくなる。美妙はこの陥穽に気づかなかった。あるいは二葉亭のような内面的リアリズムを不得意とした美妙が、おのずから選んだ道であったかもしれない。

一方、二葉亭に課された課題は何であったか。グレイの朗読にしても、円朝の嘶にしても、複数の聴衆を対象に演じられた声だったわけで、福田恆存がいうようにかれらの語り口を学んだ『浮雲』は、深刻な内面心理を語るばあい、「読者と共通の場だがひに顔を見合せながら明るみのうちに話を進めねばならぬとすれば、作者はどうしても事実から逃げて、それを滑稽めかして語」(批評家の手帖)らなければならなくなるのである。この滑稽めかした声、演技された声、誇張された声は、ツルゲーネフの翻訳『あひびき』では影を潜めることになるだろう。

(1) 同氏「円朝における身ぶりと象徴」(『文学』昭三十三年七月)。

(2) グレイの朗読は「自家みづからが其作者若くは其人物に成代りたる心持」で読まねばならぬとした道通の「論理的読法」に対応している。

6

二葉亭は「予の愛読書」の中で、散文のリズム(文調)に触れてつぎのように語っている。「日本文で文調を出したいと思うて、文章を書く時には文調が恐ろしく気になった」。この「文調」は美妙が「吾々の言文一致体」で「声調の便利が新語格よりも旧語格の方に備っている」と述べた際の「声調」とは意味合いを異にしている。二葉亭にとって日本在来の文章、美妙のいう旧語格の文調は「どうも変化が乏しく抑揚頓挫が欠けているやうに思はれ」(同)たのであった。このような認識はグレイの朗読から知ったゴンチャロフの「文調」の魅力にもとづいている。美妙のいう「声調」が外在的リズムであったとすれば、二葉亭の求めた「文調」は作者の詩想と密着した内在的リズムでなければならず、グレイの朗読が増幅してみたゴンチャロフの「文調」はその具体的な実現なのであった。

文章によつては或程度までは朗読の巧拙に拘らず文章其物の調子があつて、従て黙読をして其者に調子移つて、どんなに殺して見ても調子だけは読む者の心に移る文

ここには音読によって始めて顕在化するのではなく、黙読によっても触知しうる散文リズムの隠微な形式が示唆されている。それが読者の内面にもたらす共振作用に、二葉亭は文学の觀念と形象へと導く具体的な手がかりを見出したのである。二葉亭が翻訳にあたって露西亜文学の「文調」を日本文をかりて「再顯^{レブダク}」することに、苦心經營したゆえんもここにある。

艶麗の中にとつか寂しい所のあるのが、ツルゲーネフの詩想である。……彼の小説には全体に其氣が行き渡つてゐるのだから、これを翻訳するには其心持を失はないやうに常に其人になつて書いて行かぬと、往々にして文調にそぐはなくなる。……實際自分がツルゲーネフを翻訳する時には、力めて其の詩想を忘れず、真に自分自身の詩想に同化してやる心算であつた……(余が翻訳の基準)

二葉亭はツルゲーネフの詩想に同化する、すなわち逍遙の「論理的読法」を異国の文学に応用する困難な作業とともに、「変化に乏しく抑揚が欠けている」日本在来の文章にかわつて、ツルゲーネフの「文調」を「再顯^{レブダク}」しうる柔軟にして繊細な文体を創出するというきわめて大胆な実験を自らに課したのである。この実験の成果は同時代の読者によってどのように迎えられたであろうか。『あひびき』について語つた蒲原有明のことばに

抛つて考えてみたい。

有明にとって『浮雲』は読みづらく重苦しい調子の作物であつたが、それとは対照的に『あひびき』の透明で音楽的な「インプレッション」は「到底忘れることは出来ない」ものであつた。

そのころは未だ中学に入りたてで、文学に対する鑑賞力も頗る幼稚で『佳人之奇遇』などを高誦して居た時代だから、露西亜の小説家ツルゲーネフの翻訳といふさへ不思議で、何がなしに読んでみると巧に俗語を使つた言文一致体——その珍らしい文体が耳の端で親しく、絶間なくささやいて居るやうな感じがされて、一種名状し難い快感と、そして何処か心の底にそれを反撥しやうとする念が萌して来る。余りに親しく話されるのが訳もなく厭であつたのだ。(『あひびき』に就て『二葉亭四迷』所収)

「耳の端で親しく、絶間なくささやいて居るやうな感じがされ」たという有明の反応は、「黙読をしても、其者に調子に移つて、どんなに殺して見ても調子だけは読む者の心に移る文章」を目標に定めて、詩想に密着した文調の再現をめざした二葉亭の意図とほぼ正確に対応している。有明は作者と読者の内密な交流がもたらす快よい戦慄とかすかな反撥について語る。読者は他人を交えることなく孤独で作者と向い合い、かれが囁やく内密な物語に耳を傾ける。このような秘儀に参与する資格を許された読者こそ、「近代」の小説読

者ではなかったらうか。有明の回想では触れられていないが、この作者と読者の心理的距離が消失する感覚をつくり出した要件として、『あひびき』の視点が「のぞき」という、一人称のうちでもっとも刺戟的な効果を持つ視点であったことをつけくわえておきたいと思う。作者とともに密会の場面を覗きみる読者は共犯者の立場に身を置くように仕組まれているのである。初期の言文一致体の小説は事件を作者じしんの口を通して読者に語りかける一人称の形式をとったものが多いが、美妙の『ふくさづつみ』にしても、嵯峨の屋の『初恋』にしても、柳浪の『残菊』にしても身の上話もしくは懺悔譚の素朴な体裁に従っていて、『あひびき』の精妙な視点とは格段のひらきがある。たとえば『初恋』のばあい末尾に近く「嗚呼皆さん」という呼びかけ語が端的に示すように炉辺を囲んで老人の懐旧談に聞き入る数人の聴き手が想定されているわけであるが、『あひびき』の視点は、本来的に黙読する孤独な読者を要請しているのである。

有明が幼稚な鑑賞力で高誦したという『佳人之奇遇』は美妙が排斥した「吟ずる」読み方で読まれたのであった。それは蘆花が『黒い眼と茶色の目』でいきいきと描き出しているように、学校・寄宿舎・私塾・政治結社等の精神的共同体の内部で集团的・共同的に享受された。このような享受の場は自由民権運動の敗退とともに失われて、享受の単位は家庭ないしは個人に縮小する。美妙が読者に要請した「通常の談話態^{はなしばやう}」のように読む読み方

は『小説神髓』が提示した「親子相ならびて巻をひらき朗読するに堪へ」る改良された戯作、その具体的実現としての硯友社文学に対応するであろう。新聞小説であり、家庭小説である。硯友社文学の優勢のまゝに『あひびき』の読者が少数者であったことは否むべくもない。しかし、近代読者の系譜はじつにこの少数者の中から辿られる。それは漢文崩しの華麗な文体のリズムに陶醉して政治的情熱を昂揚させる書生達でもなく、雅俗折衷体の美文を節面白く朗読する家長の声に聞き入る明治の家族達でもない。作者の詩想と密着した内在的リズムを通して、作者ないしは作中人物に同化を遂げる孤独な読者なのである。『佳人之奇遇』の読者の類型が、その朗誦に自習のペンを休めてうっとり聞き惚れる同志社三百の寮生の姿『黒い眼と茶色の目』に求められるとするならば、『あひびき』の読者は本を小脇に林の中を逍遙しながら自然のささやきに耳かたむける孤独な読者なのである。有明に加えてもう一人の『あひびき』読者の姿を記しておこう。

「片恋」は「うき草」ほど私を打たなかつたが、その中の「あひびき」の自然描写はこれがまた私には驚異であつた。こう云う自然そのものの足音や、ささやきまでも聴きとれるやうな、美しい描写は、とうてい人間わざとは思われなかつた。私は、その頃としては思ひ切つた美装の「片恋」をかかえて、中学の裏手のお寺へつづく林の中を、ひる休みに独りでよく彷徨した。そして自分をツルゲーネフの作中の人物になぞ

らえ、始業のラッパの鳴るまで、夢見るような気持ですごした。(青野季吉「明治の文学青年」)

大正後期通俗小説の展開——婦人雑誌の読者層

1

昭和改元を目前に控えた大正十五年十二月、大宅壮一は文芸評論の処女作「文壇ギルドの解体期」を「新潮」に発表した。いわゆる円本時代の開幕と時を同じくして書かれたこの論文は、プロレタリア文学の擡頭と文学の大衆化現象とを等分に睨み据え、大正文壇の死期を宣告してみせた巨視的な文壇論であった。彼は大正文壇の特質を規定して、徒弟制度によって支えられたギルド組織（1）であるとし、このギルドを崩壊させた内部要因のひとつに婦人雑誌の進出を数え上げている。

欧州戦争勃発後洪水の如く押寄せて来た好景気の波は、多くの成金を作ると共に、中産以下の階級の懐中を潤し、我国のチャーナリズムのために膨大なる市場を供給した。